

# 論文要約

## [論文目次]

### 序

#### I 曠懷堂と堀景山年譜

- 一 「曠懷堂記」
- 二 「曠懷堂堀氏譜系」と「堀氏譜図」
- 三 堀景山年譜考証
- 四 堀景山小伝

#### II 学問論と思想

- 一 下学の道から上達の理へ
- 二 荻生徂徠宛て書簡訳注
- 三 『不尽言』考
- 四 本居宣長手沢本『春秋経伝集解』考
- 五 堀景山伝与本『日本書紀』考

#### III 貴紳・儒者との交遊

- 一 堀家と妙法院宮
- 二 近衛本『大唐六典』の板行と京儒のかかわり  
——元文四年十二月蔵板成就説——
- 三 魁星像をめぐる漢詩
- 四 宝暦三年 本藩に赴く
- 五 景山への詩文

#### IV 詩文稿

- 一 詩稿
- 二 文稿

#### V 紀行文

- 一 『ぬさのにしき』注解稿
- 二 『ぬさのにしき』考

#### 人名索引

## 序

「堀景山伝考」と題した本論文は、京都の儒学者堀景山（1688～1757）についての調査・研究の成果を一つにまとめたものである。

景山は、京都の儒学界における名門の出（堀正意の曾孫）である。しかし、同時代を生き、伊藤仁斎や荻生徂徠のように、新しい学説を唱えて注目されるような儒者ではなかった。伊勢松坂から医学修業を目的として上京してきた青年本居宣長（1730～1801）を漢学書生として家塾に受け入れ、宣長が後に有名になったことで関心を持たれてきた人物である。ただ、宣長の学問・思想形成の面から言えば、京都での五ヶ年半余にわたる遊学生活の中で、景山の存在は極めて大きな意味をもつ。契沖の文献学、仁斎の字義・語勢論や徂徠の古文辞学の方法論を援用した思考法が、景山を介して弟子の宣長に入っている。そのことは、宣長の処女作『排蘆小船』から明確に見て取れる。村岡典嗣が『本居宣長』の中でこのことを指摘して以来、宣長を「学問」というものに開眼させた人物として、景山を第一に挙げることに異を唱える者はいない。

しかし、村岡をはじめ諸先学の言及するところを再読してみると、そのほとんどが、後年、国学の大成者となる宣長サイドから見た景山像の記述でしかないことが分かる。景山は、自分が終生朱子学を奉ずる儒者であることを、徂徠に宛てた書簡で明言している。そうだとすれば、景山は、どのような経緯で契沖学、古義学、古文辞学に接し、それを自分の学問・思想の中にどのように位置づけていたのか。また、その受容の背景には何があったのか。これまで堀景山を真正面から取り上げた研究は、皆無に等しい。宣長学を改めて検討する上でも、景山の学問や人物の全体像を明確にしておく必要がある。

## I 曠懷堂と堀景山年譜

### 一 「曠懷堂記」

曠懷堂は、景山の父堀玄達が広島藩の儒官として登用され、宗家（北堀）から分家（南堀）したときに名付けた家号である。その命名の由来を記したのが「曠懷堂記」である。これまで言及されることがなかった漢文体の小品であるが、その内容からは、景山、さらには宣長に継承されていく自由討究の精神と自楽の思想の萌芽が見て取れる。

藤原惺窩門下の堀正意以来、代々堀家は朱子学を奉じてきた。玄達（正意の孫）が上記のような意識をもつ背景には、伊藤仁斎を中心とする京都の一流の文化人達との精力的な交遊があった。参集場所を持ち回りにして二十一史を読み進める結社の存在が注目される。そこは、学問・研究の場であり、社交の場となった。社友との交際は、何事にも束縛されない曠く大きな懷の世界で、充実した時を自由に楽しむことができるという思いを、玄達に強く

抱かせるようになったと考えられる。綾小路室町にある玄達宅も参会の場所となり、仁斎・東涯が出入りしていた。元禄十三年十月には、玄達宅に招かれた仁斎（74歳）が、景山（13歳）の漢詩に次韻している。こうした場合は、子が親からだけでなく、参集した諸友からも教えられる絶好の機会を作っていたということである。

## 二 「曠懷堂堀氏譜系」と「堀氏譜図」

従来、広島藩に仕えた堀家（北堀・南堀）の系譜については、小鷹狩元凱の「芸儒堀家略譜」によって、その概略を知るのみであった。しかし今回、景山の後裔にあたる堀創氏から、所蔵される「曠懷堂堀氏譜系」と「堀氏譜図」を調査する機会を与えられた。原本により、堀家の系譜の全貌を明らかにすることができた。

「曠懷堂堀氏譜系」は、前冊・後冊の二冊から成る。全55丁は一筆書きで、作成者は南堀六代目の堀正敏である。菅原道真に遡る堀家の祖の記述に始まり、江戸初期の堀正意を経て分かれる尾州堀・北堀・南堀の系譜を、天保から明治にかけて生きた正敏の代まで記している。この中では、題簽が「曠懷堂堀氏譜系」とあるように、景山の父玄達を初代とする南堀（曠懷堂堀氏）についての記述が中心となる。この系図によって、京都の儒者として著名な伊藤仁斎や木下順庵と堀家は遠戚関係にあったことが明らかとなる。曠懷堂と古義堂の関係は、予想以上に深いことが分かる。

正敏がこの「曠懷堂堀氏譜系」を作成するときに、基礎資料の一つとして「堀氏譜図」を参照していたと考えられる。「堀氏譜図」は記載内容と筆跡から判断すると、正徳五年（1715）から翌年の享保元年頃に、景山によって書かれた可能性が高い。

## 三 堀景山年譜考証

本年譜考証は、景山の一生を、今日蒐集できる限りの資料に基づいて作成したものである。依拠した資料の調査と分析については、本論文の他の章において実証を試みた。

儒学者景山の生きざまには、父玄達と従兄である正修（宗家北堀）の存在が大きく関与している。年譜考証で玄達と正修に関しても多く言及しているのは、この理由による。

また、和学に通暁していた景山を考える上で、晩年の書生であった宣長の『在京日記』と、景山所蔵にかかる和書の宣長による転写本は有益な資料となる。

## 四 堀景山小伝

堀景山は、広島藩に仕えた朱子学者である。元禄元年（1688）京都に生まれた。林羅山と並んで藤原惺窩門の四天王の一人といわれた堀正意の曾孫に当たる。堀家は遠祖を菅原道真とし、大儒として名を揚げたのは正意からである。正意は広島藩の儒臣となるが、後に尾張藩に招致された。正意の子孫が、芸州と尾州の藩儒として二つに分かれて家学を継承していくのは、この正意の経歴に由来する。広島藩の堀家は、正意の孫の代で北堀（宗家）と南堀（分家）に分かれる。北堀は蒙窩—正修、南堀は玄達—景山と続く。正修と玄達・景山が、同じ京儒の仁斎・東涯と学派を超えて交流を深めていたことが注目される。

正意は「文章」に巧みな「文苑之老将」として名高いが、その学風は曾孫の正修と景山にしっかりと継承されていた。未だ面識のなかった江戸の大儒室鳩巢に正修が、また荻生徂徠

には景山がそれぞれ書簡を呈し、「文章」について議論を戦わしている。享保十一年、景山は自ら信ずる文章論をもって古文辞学を批判したが、結果として、徂徠が主張する方法論に触発されている。徂徠と論争した翌年、景山は東涯の門人達と黄檗僧のもとで唐音を学んでいるのである。朱子学者景山が古義堂や徂徠と学問の交流をすることによって得た成果は、後の『不尽言』に見られる字義・語勢・漢文直読・人情論などの強い主張となって現れてくる。

一方、本業である儒学とは別に、景山は国書に関する相当な知識と旺盛な好奇心を持っていた。とりわけ和歌に対して興味・関心を抱き、契沖の孫弟子である樋口宗武と図って、契沖の『百人一首改観抄』を校合し出版している。後に弟子の宣長が、初めて学問に開眼したと述懐する書である。当時、契沖の著書はほとんど出回っていない。景山は契沖の写本を多く所蔵していたが、ほとんどが樋口宗武から借用して転写したものである。国学者宗武と儒学者景山は、いつどのような経緯で知己となったのだろうか。これについては、妙法院宮堯恭法親王のサロンにおいて、出入りの輩であった従兄堀正修と樋口宗武の交流がその契機であった、と私は考えている。

景山が、和書の書写や歌学に関する論を目立って展開するようになるのは、四十歳代からの十数年間である。これは、四十歳前後の儒学における学問論の変容が、和歌・和文関係の書にも波及していった結果であろう。つまり、朱子学の理念を基軸におきながら、古義堂や徂徠から古学の客観的方法の意義を教えられ、それを受け入れたことが、国書ではほぼ同じ方法を用いて研究する契沖学への接近を促したということである。

こうした和漢の学を有する景山は、家塾で門下生をどのように教育していたか。晩年の様子は、景山塾に寄宿していた本居宣長の日記（『在京日記』）が教えてくれる。それによれば、授業形態は、漢学塾では一般的な素読・会読・講釈である。面白いことに、景山が加わった会読のテキストは『史記』『漢書』『左伝』『南史』であった。かつて父玄達が、仁斎・東涯達と二十一史を読む会を結成して議論していた場面がオーバーラップする。景山は、学問の面では厳しく、学問を離れたときには人情に通じた人望の厚い先生であった。同じ京儒として交遊していた江村北海（『日本詩史』三）・清田儋叟（『孔雀楼筆記』一）兄弟の景山に対する評価は、核心をついていると思われる。

景山は、側儒として広島に赴いたとき、また参勤交代で江戸に随行したときには、文徳による経世済民を願い、経書や史書を藩主や世子に進講していた。京都に定住のまま長年召し抱えられていたのは、正意以来の堀家代々の功績によるだけではない。景山も藩の期待に応える資質・能力を十分に備えた儒学者であり、特別な待遇であったと言える。講学励精による加禄のみならず、藩主の特命による歓待の宴、藩主自らの古稀の祝い（贈歌）、景山没後の碑文の作成など、景山に対しての信頼がいかに厚いものであったかが分かる。景山の優れた徳望と学問が、藩主の寵遇の因をなしていたのである。景山は、宝暦七年（1757）九月、京都で没した。

## II 学問論と思想

### 一 下学の道から上達の理へ

文章は道載せる、という儒家の伝統的な考え方がある。景山は、文章のキーワードを「気」と「経術」に置く。I・四章で触れたように、持論とする「気」に貫かれた達意の文章観をもって、李攀龍・王世貞の古文辞に共鳴した徂徠に書簡を呈して教を乞うている。そこには、徂徠が首唱する模擬剽窃した修辞による文章の意義を問い質す意図があった。返書の中で、徂徠は、景山に批判された李・王の古文辞学が経書に基づいていないことを認めたと上で、古聖賢の教えである六経の「辞」に根ざした文章観を景山に説いた。これによって、字義・語勢に留意した古言（辞）に習熟することの必要性を景山は学ぶことになる。『論語』憲問に「下学して上達す」という言葉がある。上達する（高妙の理に達する）ためには、主観的な理屈に拠らない下学、つまり客観的な認識と手続きを踏まねばならない、ということである。景山は、古語に習熟する方法論を学問の基礎作業として是認した。

文章のもう一つの要は「気」である。景山のいう内発的な「気」は、もともと孟子の養気説によるものである。それを、徂徠と議論する以前に、仁斎学を援用して世俗の「人情」と結びつけていた。『詩経』の本質論、つまり「思無邪」論で、景山は「愚拙、経学は朱学を主とすることなれども、詩と云もの見やうは、朱子の注その意を得ざることも也」（『不尽言』）と言い切った。『詩経』の朱子注を退けた背景には、字義・語勢や世俗の人情を重んじた古義学と、それに経書を取り入れた古文辞学の影響が見て取れるのである。

ただ、景山への古学の影響・感化は「下学の道」において顕著なのであり、そのことをもって、景山が古学に転向したなどと言うことはできない。「上達の理」の目的とするものが、基本的に揺らいでいないからである。四書を中心とした朱子学の理念が、景山の学問の基底にしっかりと位置づけられている。

### 二 荻生徂徠宛て書簡訳注

享保十一年（1726）三月、景山は参勤交代に随行して江戸に赴く。その四ヶ月後、景山は当時市ヶ谷に住んでいた儒学界の第一人者荻生徂徠に宛てて、二度にわたり漢文体の書簡を書き送った。徂徠からも、その都度返簡があった。内容は、貫道の器とされた「文章」をめぐる論駁である。往復四通の書簡は、景山・徂徠各々の学問上の立場や主義・主張を窺うに十分な内容を有している。本章では、前章の内容を実証するために、景山の書簡二通（「与物徂徠論文書」「復物徂徠書」）に訓みと訳と語釈を付した。景山の主著と目すべき書は所在不明で見ることができない。そうした中で、この長文の書簡二通で開陳している文章論は、景山の思想を探るには恰好の資料である。

書簡の趣旨は、文章は経書に根ざした「気」の表現であるべきだとして、古文辞学の方法論を批判することにあつた。文中に用いられている典拠をもつ語句は、景山がいかなる古聖賢の書を好み読んでいたかを教えてくれている。

### 三 『不尽言』考

今日、転写本で目にすることができる景山の唯一の著書は『不尽言』である。伝本が何本か現存するが、諸伝本の系統と位置づけを検討してみると、京都大学本が最も自筆本に近いということが分かる。

『不尽言』は、広島藩の執政職にあった岡本貞喬が、書状で質問した七ヶ条の事項について、景山が同藩の儒官として答えたものである。貞喬は、崎門派の感化を受けたと思われる朱子学信奉者であった。『不尽言』を一書として見たとき、論旨の中心にあるのは、「徳」による人君の政治の実践である。これまで述べてきたように、景山は「徳」の現れである「文章」に秀でた正意の学問・思想を継承しながら、仁斎学・徂徠学を学ぶことによって思考の回路を一部修正してきた。十七・八世紀の儒学界の大きなうねりの中で修正した学問の方法論・意義論をもって、旧来の朱子学に固執している貞喬に人君の学問と政治のあり方を諄々と説く。それを一書にしたものが『不尽言』である。藩主・世子のみならず、執政職にある者をも学問の道から助言し補佐するのが側儒であるという自負心が、この書に底流している。

### 四 本居宣長手沢本『春秋経伝集解』考

景山塾に寄宿していた宣長が、師景山の訓点・傍注・鼈頭・句読等を書き入れた古活字版『春秋経伝集解』(30巻・15冊)が宣長記念館に所蔵されている。日本で最初に訓点を施して出版された『春秋左氏伝』は、寛永八年(1631)跋刊の版本である。全巻にわたる施点は、景山の曾祖父正意によるものであり、跋文も正意であった。景山にしてみれば、『左伝』の訓読は正意の訓点を踏襲するのが当然である。

しかし、この書き入れ本を検証してみると、景山は正意の祖点を基にしながらも、そのままではなく改訓していることが分かる。音読みが多くなり、漢唐訓詁学に基づく古点の優雅な訓法がほとんど見られない。景山の訓読に対する見解は、『不尽言』に示されている。和訓の限界を説き、日本人は漢文の語勢をわきまえて、字義を心で会得するしか方法はないとするものである。しかしこれは、唐音による直読を理想としながら、やむを得ず訓読を認めた徂徠派の消極的訓読観と同じ考え方である。正意と景山には、百年ちかい隔りがある。この間に、貝原益軒の『点例』や太宰春台の『倭読要領』に代表される新しい訓読法が提唱されている。優雅な訓読より、文義の把握に重きをおく訓読が主流となる時代にあつて、景山もその流れと無縁でいることはできなかつたのである。

### 五 堀景山伝与本『日本書紀』考

『日本書紀』の編者は、漢文体の文章をどのように読ませようとしていたか。今日なお難問である。景山が宣長に譲渡した『日本書紀』全30巻9冊の版本は、正徳四年刊の神代巻(巻1・2)と寛文九年刊(巻3~巻30)の寄り合わせ本で、巻18まで景山による書き込みがある。広く流布した寛文九年版の刊本は、漢文で記された本文の訓点や万葉仮名表記の歌謡に付された振り仮名が極めて粗雑である。

正格の漢文を目指した『書紀』の本文は、訓読を原則としてきた。景山は、句点と訓読の

ための返り点を朱で書き加え、漢文体の本文を目で追いながら文字と語句の適・不適を字義・語勢の視点で検証している。和習漢文を正しているのである。

また、歌謡についての景山の書き入れには、万葉仮名に読みの振り仮名と、表意を目的とする漢字を付したところに大きな特徴がある。景山は精確な読解に資する注釈書として、契沖の『厚顔抄』を参照していた。万葉仮名の正しい音を上代語として認識し、傍書した表意文字（漢字）を目で読むことによって、語句の意味を把握して歌の大意をとっていたのである。

### III 貴紳・儒者との交遊

#### 一 堀家と妙法院宮

京都東山七条に、天台宗の宮門跡寺妙法院がある。正保四年（1647）に三十五世門跡として就任した堯如法親王以降、皇族・公家とは別に、学問・教養・文雅の面で地下人と交流をはかる社交の場が形成されていた。地下人の出入りの輩には、東涯をはじめとして古義堂にかかわる儒者・医師の多いことが目立つ。

三十七世堯恭法親王（1717～1764）の時代にも交流の場は継承され、学問では仏書と漢籍を中心として講釈と会読の形態をとって学びがなされていた。漢籍は、四書（とくに『論語』と『孟子』）と史書が主なテキストになっていたが、古義堂の影響であろう。元文元年（1736）に、それまで妙法院サロンに出入りしていた東涯が亡くなる。その年、東涯と交代するかのよう堀正修が初めて妙法院に参上している。以後、正修が70歳で没するまでの18年間、堯恭法親王にとって正修は学問の師であり、また顧問格の存在となっていた。

宝暦三年（1753）七月、正修が没し、その翌月には従弟の景山が召し寄せられている。景山は正修の仕事を引き継ぎ、亡くなる年まで妙法院に出入りするが、正修と同様に堯恭法親王からの信頼は頗る厚かった。

#### 二 近衛本『大唐六典』の板行と京儒のかかわり

——元文四年十二月蔵板成就説——

『大唐六典』（唐・玄宗勅撰、李林甫奉勅注）は、唐の官職制度を載せた30巻からなる書物である。我が国において、近衛家熙（1667～1736）の精密な校訂を経て上梓された近衛本『大唐六典』は、和刻本の最初でありながら、極めて質の高いテキストとして評価されている。ただ、近衛本は奥付・刊記をもっていない。そのため、これまで成立年次については諸説あげられてきた。本章では、この書の出版にかかわる事情と実態を明らかにし、板行の年次を特定した。

京都第一の文化人といえる家熙にとって、京住みの儒者松下見櫟と堀正修の二人は、学問分野における特別な相談相手であった。見櫟の日記『真山居恒録』と近衛家の家司が書き継ぐ『雑事日記』の二つの資料を検証することによって、次のことが明らかになる。

近衛本『大唐六典』の板行は、家熙致仕後の業の集大成であり、彼の悲願であった。出版

間際に、底本より原本に近い古本を入手したことによって、家熙は校合を一からやり直すが、元文元年（1736）、志半ばにして没した。その後、孫の近衛内前のもと、かつて家熙のサロンに出入りしていた五人（儒者・黄檗僧・賀茂祠官）が、家熙の遺志を継いで校合に専念する。この校合作業において牽引的役割を果たしているのが、松下見櫟と堀正修であった。元文四年十二月、家熙没後三年余りを要して近衛本『大唐六典』は板行された。

### 三 魁星像をめぐる漢詩

魁星像は、景山宅（南堀）に伝わる古像である。文学の瑞祥として梓潼帝君を鑄造したもののらしい。享保十一年（1726）、景山の母（佐濃）は、この像を詩材として景山（39歳）と宗家北堀の正修（43歳）に詩を作らせ、18世紀初頭における東西の大儒に和韻詩を求めさせた。詩の応酬の相手は、鳩巢（69歳）・東涯（57歳）・徂徠（61歳）である。景山と正修の漢詩は、今日に伝わらない。ただ、正修の贈詩に和した鳩巢と東涯の詩序と漢詩から、正修の詩は韻字を下平声八庚韻とする二十句からなる七言古詩であったことが分かる。

徂徠が景山に贈った漢詩は、鳩巢・東涯と異なり、『詩経』の詩形を模した雑言古詩であった。これは、一期一会となる景山との対面で、母佐濃が『詩経』に通じた女性であることを徂徠は知り、和韻詩を求めさせた景山の母の意図を汲んだものであろう。

堀家に伝わる魁星像は、学問、すなわち文章の才に長けた正意を祖とする学統であることを象徴する古像であった。佐濃が長男の景山と宗家の正修に、当代の著名な儒者に応酬詩を求めさせた意図は、正意を家祖とする堀家が今なお健在であることを世に知らしめることにあったと思われる。

### 四 宝暦三年本藩に赴く

宝暦三年（1753）九月、景山は芸侯浅野宗恒の招聘により広島に赴く。翌年四月までの半年余りの滞在期間中に、多くの人々と交遊して様々な詩文を書き残した。

「逍遥篇」と「書逍遥篇後」は、藩主宗恒の特命による歓待への謝詞を述べた後、藩主の心構えを側儒の立場から説いたものである。「巖島参詣記録」は、広島の豪商松井古泉と巖島に遊び、その折に作った漢詩「巖島神廟」と和歌（19首）・発句（1句）を収める。これまで景山の詠歌は三首しか知られていなかったが、この新出資料によって歌僧似雲の従弟松井古泉と親交が深かったこと、そして景山にとって詠歌は手慣れたものであったことが分かる。「途次の吟詠」として一括りにしたのは、広島までの途中および滞在中の詩・歌・文章であり、すべて新出資料である。

### 五 景山への詩文

本章には、寺田臨川の書（1通）と、日下生駒（1首）・本居宣長（2首）・山田孟明（1首）・龍草廬（1首）の漢詩を収めた。広島在住の臨川は、藩儒の中心的な存在であった人物である。宣長と孟明は最晩年の景山の弟子、生駒は京都に住む草廬を介して景山を知るようになった儒者である。各々の詩文で景山の人となりに触れているが、景山に「徳望」があったという点では皆共通している。I・四章の「堀景山小伝」で紹介した江村北海と清田儋叟の景山評は、やはり核心をついている言葉であると言えるであろう。



## IV 詩文稿

### 一 詩稿

「詩稿」には、様々な情況・場面で作られた景山の漢詩 31 首を収めている。第 I 部から第 III 部までに登場した人物とのかかわりから見ても、景山は他の儒者と同様に、相当な数にのぼる漢詩を作っていたと考えるのが自然であろう。この 31 首は、今回蒐集することができた景山の漢詩の全てである。それぞれの詩に、訓読・通解・語釈を付すことを試みた。題詠詩とは別に、広島藩・古義堂・妙法院などに関係する詩もあり、交誼の一端を改めて窺うことができる。江村北海は、その著『日本詩史』の中で、「其詩結構整齊、亦一時作家」と景山の詩を評した。

### 二 文稿

「文稿」には、序・跋・銘・記・伝・書簡を挙げた。これらは、現在所在不明の『景山文集』あるいは『景山筆記』の一部として収められていたものと考えられる。

最初の「自警編序」は広島藩主浅野宗恒の『自警編』に寄せた景山の序文である。道徳を重んずる文武兼備の治政を説くもので、側儒としての堂々とした主張である。本職としない分野においても、序・跋・銘・記など、ここに収めた資料以外にも多く書き記していたと思われる。本章所収の資料には、訓読・通解・語釈を付した。経書と史書に典拠をもつ語句を多用しており、叙述する内容からも景山の多方面にわたる知識と高い見識が窺われよう。景山の学問・思想の領域と趣味・教養の広さと深さ、そして幅広い人脈を知るには貴重な資料と言える。景山は、京都のすぐれた文化人であった。

## V 紀行文

景山の著作の一つに『ぬさのにしき』と題する紀行文がある。堤朝風による転写本のみが知られる天下の孤本である。広島藩の儒官として江戸勤務を終え、秋九月に中山道を経由して、京都の自宅に戻るまでの十四日間にわたる所感を記した旅日記である。

第 V 部では最初に、『ぬさのにしき』の本文をいくつか区切って翻刻し、それぞれに注解を付け加えた。この注解によって、旅路の出来事・見聞・印象とは別に、『ぬさのにしき』の文章上の特徴が浮かび上がってくる。

その特徴を要約すれば、一に、書き慣れた和文に、和漢の古典を典拠とする語句を修辞としたものが見られる。とりわけ、わが国の古歌・古文の引用の多さが目立つ。二に、参照したと思われる二十余種の古典作品の中では、古歌・古文の代表格ともいえる『万葉集』『古今和歌集』『源氏物語』といった作品の語句を引く頻度が高く、それらの語句を効果的に表現することで、情趣に富む和文を形作っているということである。

既述したように、景山は『不尽言』では詩歌における人情論の主張や古今伝授思想の批判

を展開し、さらには国学者樋口宗武と相図って契沖の『百人一首改観抄』を刊行していた。儒学者でありながら、和歌・和文の教養・学識が相当なレベルにあることは容易に想像されるところであった。紀行文『ぬさのにしき』の記述は、その文学的な面での学殖の深さと豊かさを、改めて我々に教えてくれている。

以上